

『La Nouvelle Héloïse』から『Emile』へ

——二つの女性像の考察——

横 山 ひ ろ み

ルソーは、1758年、*La Nouvelle Héloïse* をほぼ完成するのと時を同じくして、*Emile* の執筆に取りかかっている。私はここで、これら継続して書き進められた2作品に於て描かれる女性像を、特にその教育方針を通して考察することによって、作品間の関連性を明らかにしてゆきたいと考える。

ルソーは、*Emile* に於て、彼が理想とする青年、エミールに対する教育方針を詳細に展開しているのであるが、彼が成人に達した最終章に於て、その妻としてふさわしい女性について独自の見解を述べ、彼が理想とする女性像を導き出している。それはまず最初、理想女性を育てるために与えられる教育方針の解説に始まり、その後、その教育を現実、エミールの妻となるべき女性、ソフィーの上に具体化させる形をとっている。そこで私は、まずルソーが、ソフィーを典型とする女性に、如何なる見解の上に立って、具体的にどのような教育方針を適用しているかを検討することによって、理想的女性像を浮き彫りにしてゆきたいと考える。

彼がこの作品中で展開する女子教育の方針はすべて、彼のこの言葉によって要約されていると考えられる。「女子教育はすべて、男性に関連したものでなければならない。男性の気に入ること、その役に立つこと、男性から愛され、尊敬されること、男性が幼い時には養育し、大きくなれば世話をやくこと、彼らに助言を与えること、彼らを慰めること、彼らのために、生活を楽しむ、快いものにしてやること、こういうことが、あらゆる時代を通じて女性の義務であり、また、女性に小さい時から教えこまねばならないことである。」⁽¹⁾そして、

この方針を生み出し、具体化するものとして、彼独特の女性観が重要な役割を果たしていることを見逃してはならない。彼が女性を位置づけるために最も重視するもの、それは男女間の唯一、決定的な相違、つまり、性の相違である。《Voulez-vous toujours être bien guidé, suivez toujours les indications de la nature. Tout ce qui caractérise le sexe doit être respecté comme établi par elle⁽²⁾》これが至高の規準となってその教育方針をも裏付けているのである。性の相違に関して更に彼の意見をたどるうちに、私は女性に生来課されている条件として、2つの主要な自然条件が潜んでいることに気づくのである。これらの条件は、彼が述べる女性教育のあらゆる具体的方針の根拠となり、支柱となっていると考えられる。それぞれの条件を検討してみよう。

第1の自然条件は、男性は生来、力が強く、能動的で、又、正確な判断力、思考力を有しているのに対して、女性は生来、力が弱く、受動的で、判断力は皆無であり、外界のものは何ひとつ自らの力で見出すことができない存在であるという事実である。《De cette diversité naît la première différence assignable entre les rapports moraux de l'un et de l'autre. L'un doit être actif et fort, l'autre passif et faible⁽³⁾》この条件を鑑みた上で、「女は多くのことを学ばねばならない。しかし、唯、女が知るにふさわしいものだけを学ぶべきである⁽⁴⁾」という彼の言葉は、確かに大きな力となって多くの方針を与えているのである。そこでまず現われる方針は、判断力の無い女性には、創造的な仕事を目標とさせず、専ら実用的知識の習得を目ざすよう指導することである。《En général, s'il importe aux hommes de borner leurs études à des connaissances d'usage, cela importe encore plus aux femmes⁽⁵⁾》

では実用性の追求という面からその方針を具体的にたどってみよう。まず少女には、家事に役立つことを目的とした実用的な技術を身につけさせねばならない。それは針仕事に始まり、裁縫、刺繍、更にレース編みへと進められるものである。実際、ソフィーが最も念入りに教えられたのはそれらの技術であり、又、料理・配膳から家計簿に至る細々とした家事仕事であった。しかも彼女は、それらを将来への目的意識も無いままに、単に娘の義務として強制され

ているのである。初期の学習についても、少女には読み書きよりも早い時期に、実用的な計算術を優先的に教えるよう定められている。女性の才能に関しても同様の指導が見出される。女性は才能に恵まれていようとも、その才能はあくまでも実用的技術の応用範囲内に留めておかねばならないのである。男性の世話という多様な作業を完璧に遂行するためには、芸術・学問などの底深い分野に専念することによって本来の実際の作業を怠ることは絶対に避けねばならないからである。例えば、刺繍技術を習得した少女は自然にデッサンへと興味を進めるであろう。しかし、絵画の分野に於ける学習はせいぜい被服のデザインや刺繍の図柄に役立つ限りのもので十分とされている。決して風景画、人物画といった非実用的芸術部門に立ち入らせてはならないのである。ソフィーもまた、生まれつきいくつかの才能を持っていたが、歌に関しても、持前の可愛い声で楽しく正確に歌うよう指導されているだけで、本格的に音符を読むことは全く教えられていないし、ダンスについても、軽やかに優美に歩き、いかなる場合もすんなりとお辞儀ができるように練習するにとどめられているにすぎない。つまり彼女の才能は実用的に、外観的な優雅さを増す程度にしか伸ばされ得ないのである。

次に現われる方針は、女性に実用的技術を与えるのみならず、重要な省察事項として男性についての研究という主題を設定することである。つまり、能力が無いゆえに女性には抽象的、純理的な真理や、科学的原理・公理などの探究といった分野はすべて閉ざされているが、一方で唯1つ許された研究対象が男性⁽⁶⁾なのである。《Il faut donc qu'elle étudie à fond l'esprit de l'homme》
低い能力的条件を背負った女性は、自らの弱さを補うために男性の助力を必要とするのである。そこでまず、男性固有の情念の動向を研究することによって、その心を魅了し、女性へと指向させる技術を得ることができる。つまりその技術の有効的利用によって女性は、男性の関心を自らに向けさせ、更にその行動力を喚起することによってより積極的な援助を容易に受けることができるのである。自分の言動、目つき、身振りによって、そんなことを考えているような素ぶりも見せないで、自分の気に入った感情を彼らに抱かせる、そんな男

性を魅了する技術を女性は習得しなければならないのである。

それに付随して、少女に対する教育方針がまたひとつ設定される。それは、男性に気に入られるような女性を目ざして、常にその女性像を規範として少女を導き育てるというものである。そしてその方針もいくらかの具体例となって実行に移されているのである。まず幼女の遊びに於てこの方針が見出される。幼女に対して勧められる遊びに人形あそびがある。ルソーによると人形は女性特有の遊び道具であり、疑いもなく、人に気に入られるという女性の使命に基いて当然定められた女性の好みなのである。幼女は皆、1日中人形の衣装を取りかえるのに熱中するものであり、思う存分それをさせてやればよいというのである。つまり彼女は、人形の服装に関して新しい組み合わせや身の飾り方を工夫することになるのであるが、彼女にとってその人形は単なるおもちゃではなく、彼女自身をその上に投影した存在なのである。彼女は自分自身を人形に託しているのである。人形を次々と飾り立て、そこにありったけの媚態を注ぎこみながら、同時に彼女は自分の身を飾る練習をし、可愛く、見晴えがして、男性の気に入るような服飾趣味を形成しているのである。こうしてお人形あそびは、男性に気に入られる存在を目ざすという女性の使命を十分に満たすものとして大いに推奨されているのである。又、幼女は未だ魂よりも肉体の発達段階にあるため、その訓育は肉体的なものが主となるのであるが、そこでもこの方針が見出される。つまり、男子には一般的な体力発達をめざして飛躍、走行などの訓練が行われるのに対し、女子には、ただ優美に振舞えることのみを目的とした指導が行われる。体力より魅力を増す訓練内容が男性の好みを意識したものと考えられるからである。次に、少女に成長した段階に於ては、話術の指導方針の中に同様な目的が見出される。

少女達には早くから話術の才能が伸ばされる。それは精神によって語られる話術が、聞く人の肉体に生気を吹き込み、容貌に活気と変化を与え得るのであり、それが最も人を喜ばせる技術であるからだ。《Le talent de parler tient
(7)
le premier rang dans l'art de plaire》その指導に関して、次の3つの注意点が挙げられる。まず話す内容に関して、男性は自らの知っていることを述べ

ばよいが、女性はまだ、人を喜ばせることのみを話すことが要求される。両者が語る話には真実の叙述以外、いかなる共通点もあり得ないのである。《L'un doit avoir pour objet principal les choses utiles, l'autre les agréables》⁽⁸⁾ 第2は、言葉遣いに関して、真実を語る場合でも決して下品にしてはいけないという制約が与えられる。第3は、訓練方法に関して、教師から質問を与えることによって、少女に多くしゃべらせるよう心がけることである。それは彼女達が楽にしゃべり、敏速な受け答えをし、精神や舌がなめらかに回転することを可能にするのである。この会話技巧は話の内容と共に、確かに人を楽しませる要因となるであろうし、同時にその指導過程に於て、男性の好みを織り混ぜて知らしめる効果もある。この様に、少女に要求される話術もまた、男性を魅了することを主たる目的としているのである。それに加えて、他面から話術を磨く基盤として少女には良い趣味が求められる。しかしその趣味に関しても、それは決して自らが楽しむものではなく、男性を楽しませるために役立つものと規定されているのである。《Mais pensezvous qu'une femme aimable et sage, ornée de pareils talents et qui les consacrerait à l'amusement de son mari, n'ajouterait pas au bonheur de sa vie.....?》⁽⁹⁾ この様に、男性に気に入られる女性の育成を目ざして、さまざまな方針が具体的に考えられているのである。

更に、女性が行う事柄すべては、男性の判断、指示を仰がねばならないという方針が示される。この方針も自然法則に因るものである。《Par la loi même de la nature, les femmes, tant pour elles que pour leurs enfants, sont à la merci des jugements des hommes》⁽¹⁰⁾ つまり、判断力の欠如により女性は男性の理論支配に完全に従うことになるのである。宗教教育に於てこの方針が見出される。女子には自らの信仰の選択さえ許されていない、ルソーによれば女の信仰は権威に服従させられているのである。自分自身で判断できないがゆえに夫や父親の宗教をそのまま受け入れねばならないのである。ソフィーの母の言葉がそれをよく示している。《Ma fille, ces connaissances ne sont pas de votre âge ; votre mari vous en instruira quand il sera temps.》⁽¹¹⁾ こうして女性は、教義に関して何ら解説を与えられることもなく、たとえ間違

った宗教であろうとも男性の示す信仰に完全に服従することを強いられるのである。《Puisque l'autorité doit régler la religion des femmes, il ne s'agit pas tant de leur expliquer les raisons qu'on a de croire, que de leur exposer nettement ce qu'on croît》⁽¹²⁾

以上検討してきた女性に対する様々な教育方針—実用性の訓練、学問研究の禁止、男性についての研究の推奨、気に入られる女性への指向、及び男性の判断への絶対的服従—は、すべて第1の自然条件を源として創り出されたものである。

ルソーの女性教育の基盤を成し、女性を生来規定する第2の自然条件は、子供を生むという固有の義務を課せられているという事実である。《Les femmes, dites-vous, ne font pas toujours des enfants! Non, mais leur destination propre est d'en faire.》⁽¹³⁾ 女性として生まれた者にとってその存在価値は、何をおいても男性のために子供を生むことにあると考えられている。こうして出産の使命が、それに至るまでの女性の人生を男性中心の方向へと定めることになる。ではその重大な責務を果たした瞬間に、彼女はそれに関するあらゆる束縛から解放され、自由な自分を獲得できるのかといえば決してそうではない。むしろ母親となり、自分の子供を両腕に抱いたその時から彼女はより大きな義務を背負うことになる。つまり男性のために子供を生んだ女性には、次にその子供を立派に育て上げるという仕事が待っているからである。子供は何よりも大切な、男性からの預り物なのであるから。《c'est à celui des deux que la nature a chargé du dépôt des enfants d'en répondre à l'autre.》⁽¹⁴⁾ このように、第2の自然条件は生まれつき課せられた出産という仕事であり、この義務によって全機能を支配された女性は、妻として子供を生むという点に於て、更に母としてその預り物を育て上げるという点に於て、一貫して男性のために自らの全存在を捧げ尽すことを余儀なくされているといえる。この女性の宿命的な自然条件もまた、その教育方針に独特の規定を与えているのである。

まず、少女期から既に、将来丈夫な子供を生むことを目的としてその体質作りが考慮されている。《Les femmes ne doivent pas être robustes comme

eux, mais pour eux, pour que les hommes qui naîtront d'elles le soient aussi.⁽¹⁵⁾》つまり、その環境として、閉め切った部屋の中で、母親の細かい配慮によって甘やかされて、不活動な生活を余儀なくされる家庭内よりもむしろ、広い庭に囲まれて、規則正しい集団生活が行なわれる修道院が好ましいと判断されている。

またこの条件に関する大きな問題として、男性に従属し、自らに課せられた出産と長年にわたる育児を完璧に務め上げねばならない女性は、その当然の結果として常にその責務のみに専念し続けねばならないという事実が重視されるのである。女性の人生の大部分にわたって、1日も途切れることなく継続して深くその根底から彼女の生活内容を支配するこの義務は、一瞬たりとも彼女の興味が、行動がそれと無関係な方向へ移ることを許さない。そのためにも女性への教育方針に於ても、特にその精神生活の面に重点を置き、常に自らの義務に立ち帰らせる指導が考えられるのである。まず、幼い頃から多くの拘束が与えられる。好みに基いた一切の気まぐれは許されず、常に他人の命令、他人の意志に従わせられる。好きな仕事に精魂込めて熱中することも許されず、遊びを急に中止させられても、決して不平を言うてはならないのである。女性にとって従属は自然な状態なのであるから。《la dépendance étant un état naturel aux femmes, les filles se sentent faites pour obéir⁽¹⁶⁾》こうして物心ついた時から、女性は自分の意志やあらゆる自由を奪われ、多様な拘束で縛られ、自己と闘い、それを殺して他人の意志に従わせるよう強制される。この様に長年に渡ってこの制約の下で成長した女性には、あらゆる外部規定に対する自己抑制と従属は完全に習慣化され、彼女はその生涯を通じて課された義務を何の抵抗もなく唯ひと筋に遂行し、たとえそれが不正な性格を持つものであったとしても自らを支配する男性の意志に対して、完全に温順でいられるのである。《Il faut les exercer d'abord à la contrainte, afin qu'elle ne leur coûte jamais rien ; à dompter toutes leurs fantaisies, pour les soumettre aux volontés d'autrui.》

《faite pour obéir à un être aussi imparfait que l'homme, souvent si plein

de vices, et toujours si plein de défauts, elle doit apprendre de bonne heure à souffrir même l'injustice et à supporter les torts d'un mari sans se plaindre.⁽¹⁷⁾》 実際、娘に成長したソフィーは、既にその習慣を身につけているが、ルソーはこの理想女性を称えながらもなお、希少価値となってしまった女性の温順さを主張しているのである。《Tel est l'aimable naturel de son sexe avant que nous l'ayons gâté. La femme est faite pour céder à l'homme et pour supporter même son injustice.⁽¹⁸⁾》この様に第2の自然条件は、少女を身体的・精神的に規定する重要かつ独特な教育方針を生み出しているのである。

以上の様に、*Emile* に於ける女性に対する教育方針は、すべてこれら2つの自然条件に基き、そこから派生したものであるといえる。第1の自然条件は、女性は生来、判断力、考察力を全く持たないという、能力面での女性の劣等性を示したものであり、この条件はその教育内容として、まず男性によって既に創造され、完成され、命ぜられた事柄を実行に移すための実用的知識を女性に得させる指導、自らの非力の補助を男性に求めることを目的とした男性研究の推奨、気に入られる女性像の育成、更に男性が行う判断、指示への服従の強制といった方針の根拠を成すものである。第2の自然条件は、男性に奉仕するために女性は生来、出産・育児などの義務を課されており、生涯その仕事のみ専念せねばならない、という女性の宿命的課題を示したものであり、この条件に従って規定された方針として、出産を考慮した体質作りに関する指導や、長期間にわたり常に自らの義務に専念し、男性に対して完全に温順であることを目的とした自己抑制の習慣化の訓練が主張されているのである。ここで2つの自然条件と共に、それから生れた具体的な教育方針を鑑みみると、それによって育成されるべき理想的女性像が明確な形で浮び上がってくる。それは、自己の全存在、つまり身体及び意志、人生、あらゆる精神世界すべてを男性に征服されて生きる女性の姿である。「われわれは女なしでも生きてゆけるだろうが、女はわれわれなしでは生きてゆけまい。⁽¹⁹⁾」というルソーの言葉がその女性像をよく語っているといえよう。

ではここで、*La Nouvelle Héloïse* に目を移してみよう。この作品は女主人公ジュリの人生を書簡体小説風に語ったものであるが、それもちょうどソフィーと同じ年頃の娘時代から描き始められている。彼女もソフィー同様、高邁な精神を持った優しい父母によって大切に育てられた1人娘であり、2人の家庭的環境はほぼ同じ状況に置かれているといえる。ところがこの2人の女性の存在観を比較した時、私はそれが全く異った性格を持っていることに気づくと同時に、そこに2つの対照的な女性像を見出すのである。しかもその相違は他でもない、娘に与えられた教育方針に起因していることが分るのである。そこで、*Emile* に於て女性教育を規定している2つの自然条件に基いて、ジュリという女性をソフィーと比較対照しながら分析してみよう。

まずソフィーの教育に関して、女性を能力的に低いものと断定した第1の自然条件は、ジュリの教育に対しては何一つ影響力を持っていないのである。彼女は男性に勝るとも劣らない学問の機会が与えられ、しかもその成果を十分に身につけているのである。彼女の母親は、仕事で長期にわたり家を留守にする父親から娘の教育を任されているのであるが、その母親はひとりの聡明な青年を家庭教師として選ぶことによって、彼女を学問のある立派な娘に育て上げようとする。青年の言葉がそれを示している。《Sachant que j'avais cultivé quelques talents agréables, elle a cru qu'ils ne seraient pas inutiles, dans un lieu dépourvu de maîtres, à l'éducation d'une fille qu'elle adore.⁽²⁰⁾》彼女はこの家庭教師の指導の下で、芸術の才能を伸ばし、書物を読み進み、学識と共に深い洞察力を得るまでに至っている。彼女に与えられた教育は、学問をただ趣味的な、中途半端なものに留めてはいない。装飾的な性質の本はあらかじめ排除されていた。教師は言う《hors de Pétrarque, le Tasse, le Métastase, et les maîtres du théâtre français, je n'y mêle ni poète, ni livres d'amour, contre l'ordinaire des lectures consacrées à votre sexe.⁽²¹⁾》それらの代りに専門的な考察を加えた書物が与えられた。代数、幾何、物理学、芸術、近代史、哲学、そしてイタリア語を始めとする外国語など。ジュリはこれらを教師と共に学び、そして習熟していった。彼女はごく普通の地方地主の娘であるが、学

間を理解する能力は十分にあると思われる。ある時は、教師が彼女に宛てた手紙の中で、旅先で耳にしたイタリア音楽についてその感動的な音楽性を、メロディー、ハーモニーに関して理論づけ、シャンソン、オペラとの比較をえんえんと論じているが、それを見ても彼女の芸術理解がどの程度まで進んでいたかは自ら明らかである。その上彼女は、ただ書物が示し、教師が教える事柄を理解するに留ってはいなかった。教師と共にそれを批評し、論議し、自らの手で学問の扉をたたくことさえできるのである。《Te souvient-il qu'en lisant ta République de Platon nous avons autrefois disputé sur ce point de la différence morale des sexes?⁽²²⁾》という彼女の書簡がそれを示している。この様な教育方針に導かれて、彼女は学問を受けとめ、更にそれを深めてゆき、ついには自らのための学問に目覚めて、その精神世界の中に学問の根を深く定着させたのであった。これに反して、ソフィーに対する学問には大きな相違が見られる。学習内容としても、彼女は生来判断力を持たないという認識に従って家庭内の実用的知識が与えられただけで、音楽に関しても音符を読むことすら教えられていないからである。真の学問を与え、能力を伸ばし、生徒自らが学問への意欲に目覚めるまでに導いたジュリの教育には、第1の自然条件の規定は全く見られない。それはむしろ、この条件をはるかに超越した観点から生み出されたものだといえる。

また、ソフィーは男性に気に入られることを目的とした教育、つまり服飾練習のお人形あそび、男性心理の観察、話術の訓練を受けたのであるが、ジュリはその様な指導を全く受けていない。彼女は男性の気に入るように振舞うところではない。教師に対しても気まぐれな態度で接し、彼を嘆かせることさえある。《Ainsi, l'inégalité que vous affectez tourne à la fois au préjudice de tous deux.....⁽²³⁾》

宗教に関しても同様のことが言える。ソフィーにあっては、宗教はすべて男性によって示された教義を、女性は何の説明も与えられることなくただ信じ、従うよう指導されているが、ジュリの方は、少女時代に宗教を強制されたり規定されることはない。むしろ彼女は、自らの正しい判断力を用いて自力でそれ

を導き出すのである。つまり、教会で自らの婚礼の席にあって、なお将来の運命に迷いつつある時、彼女は或る胸を打つ不思議な感動を覚え、その神秘を回顧し、その主を解き明かすことによって、そこに神の存在を知るのである。それは彼女を善へと指向させる神であり、誰によって与えられ示されたものでもなく、彼女が生み出し、彼女独自の理解の上に成り立った神なのである。《C'est à la contemplation de ce divin modèle que l'âme s'épure et s'élève, qu'elle apprend à mépriser ses inclinations basses.⁽²⁴⁾》彼女は自らの思考力を駆使することによって自分の宗教を得るのである。彼女は判断力を持ち、それを用いることも全く禁じられていないのである。これらの事例の対比的検討によって、第1の自然条件はジュリの教育には全く規範を与えていないことが明らかとなった。

次に第2の自然条件に基いて調べてゆきたい。ソフィーの教育は、女性の天職を規定したこの条件を拠り所としているが、ジュリの場合は、それは何ら意味を持っていないのである。まず最初、ソフィーの両親は、この条件に基いて、娘が将来妻として母としてその天職を十分に務め上げることが目的として彼女を教育したのである。彼女は、裁縫などの家事仕事を早くから教えられと共に、当然のこととして職務に、男性の意志に服従できるようにと、幼い頃から、命じられた仕事や他人の意向に拘束され、自由が与えられず、自己抑制を強化することを習慣化されたのである。しかしジュリは、家事仕事の代りに学問を教えられたし、その他の生活態度に関しても特に強制されることは無い。母親は娘を信じ、自由に放任しているのである。それは娘にとっては過大な信頼である。《Quoique je trouve à cette bonne mère beaucoup trop de sécurité, je ne puis me résoudre à l'en avertir.⁽²⁵⁾》彼女は天性が節度に命じること以外には何の外的束縛も与えられず、自由快活な生活が許されている。よって、男性の意向のままに従ってばかりはいない。それどころか恋人から彼の意志決定権を託されることさえあるのだ。彼は言う《Dès cet instant je vous remets pour ma vie l'empire de mon volonté.⁽²⁶⁾》次に、ソフィーは、男性に仕えるために女性は子供を生むのが天職であると教えられたが、ジュリは、何

よりも自分自身のために子供を欲するのである。彼女は自分の実らぬ恋をかなえるための危険な賭として、恋人の子供を生みたいとさえ望むのである。人生が悉く定められた娘と、自分の人生を自由に創り出そうとする娘、ここにも2人の大きな相違が見られるのである。そして最後の検討として、ソフィーの両親が娘の教育を完成させるべく行った努力、つまり、娘の婿選びに見せた彼らの細かい配慮に注目せねばならない。大切に育ててきた娘を結婚させんとする時、彼等は最適の相手を定めることに没頭するのである。まず娘に、誠実で立派な男性に対する好みを持たせ、理想の男性を求めてパリの社交界まで赴かせ、青年エミールと愛し合っていることが分っても、結婚を決めるまではあくまでも慎重に2人を監視するのである。この周到な計画と熱意は、彼らが娘の結婚後の人生を、その教育完成の主目標として考えていることを如実に語っている。しかるにジュリの両親は、結婚に関して娘に何の予備知識も与えなかったし、父親は、娘の結婚相手として、自分の命の恩人であるという理由だけで、彼女とは親子ほども歳の差がある男性を選び示すのである。それは娘の将来よりもむしろ父親の都合を考えたものである。彼にとって娘の結婚は、その教育の何の目標でもない。それは単なる生活状況の変化に過ぎないのである。この様な娘の結婚相手に対する両親の関心の差異は、おのずからその教育目標の相違を示しているといえる。

これら3点に関する検討により、ジュリの教育は、ソフィーを支配した第1の自然条件と共に、第2の自然条件によっても全く規定されていないことが分るのである。こうして、2女性に与えられた教育が根本的に相反することが明らかとなり、同時に、そうして育てられた2人の女性像がはっきりと浮び上がってくるのである。ソフィーは、女性としての能力的劣等性により、常に絶対的に男性に従属し、妻として母として生活することのみに人生目標を持ち、その義務の遂行に専念する女性であり、ジュリは、男性と同等の判断力、思考力を認められ、自らの力で考え、学び、理解し、そして意志のままに快活に行動する自由を持っている女性である。彼女はその意味で、自由人なのである。

2人を育て上げた教育は、この様に相反したものであるが、その教育は、それぞれの様な結果を生み出しているのであろうか。2人のその後の運命をたどってみよう。ソフィーは、誠実な、優れた男性のために自分はふさわしいと信じ、夫と呼ぶに値する男性と出会うために両親と共に努力し、結婚に向って邁進するのであるが、そこで奇くも理想の女性を捜して旅を続けるエミールと出会い、互いの保護者の厳しい監督の下であらゆる面に於て2人の調和が確認された後、平穩で幸福な結婚生活を手中にすることができるのである。彼女の両親は娘を幸せにすることができ、その教育は見事に実を結んだのである。これはまた、ルソーが理想とする教育でもあった。彼は新しい夫婦を前にして、感動をこめてこう賞讃している。《Heureux amants! dignes époux! pour honorer leurs vertus, pour peindre leur félicité, il faudrait faire l'histoire de leur vie. Combien de fois, contemplant en eux mon ouvrage, je me sens saisi d'un ravissement qui fais palpiter mon coeur!⁽²⁷⁾》

次に、ジュリの運命に目を向けてみよう。彼女は将来の結婚を目的として生活を束縛されることもなく、学問と共に自由な精神生活を与えられていた。しかし、その後の彼女の人生は、その懸命なる努力にもかかわらず、彼女を破滅へと導かざるを得ないのである。それは彼女の人生の2時期に於て認められる。まず娘時代には、結婚に対する意識が弱かったがために、彼女は自由な心のままに家庭教師の青年を愛してしまう。恋愛、それは最も危険な官能の罠であり、ソフィーに対してもルソーが厳しく禁じているものである。《Le plus dangereux de tous les pièges, et le seul que la raison ne peut éviter, est celui des sens.⁽²⁸⁾》それは自らを墮落させるばかりである。実際、彼女は何の先入観もなく、自分の感情を素直に受け入れただけであるが、そこに至って初めて眼前の結婚という壁にぶつかるのである。しかし、自由な心を優先して育った彼女は、悩みつつ、迷いつつもやはり感情に身を任せ、自らを袋小路に追いや、破滅の道を辿ってしまうのである。《Un instant, un seul instant embrasa les miens d'un feu que rien ne put éteindre⁽²⁹⁾》彼女に与えられた自由で寛容な教育が、結局は彼女を不幸に陥れたのである。彼女の母親に対す

る嘆きの言葉がそれをよく語っている。《Mais ma mère, ma tendre mère ! quel mal m'a-t-elle fait ? Ah ! beaucoup : elle m'a trop aimée, elle m'a perdue.⁽³⁰⁾》

第2の破滅は、後の結婚時代に訪れる。それは完全な破滅—死—の形となって現れる。自由な感情を育まれたがゆえに、彼女は娘時代に恋愛の罠に落ち、自らを墮落させたのであるが、そこで至高の存在である神を自己の情念を抑制するための矯正者、監督者として常に観照する、という彼女独自の宗教を確立することにより、ついに恋愛感情を心の中から消去するに至る。厳密には、恋愛感情を友情へと変質化させるのに成功するのである。⁽³¹⁾彼女は昔の恋人への愛情を完全に克服したことを、次の様に宣言している。《Le sentiment qui m'attache à vous est si tendre et si vif encore..... pour moi, j'en connus un trop différent pour me défier de celui-ci, je sens qu'il a changé de nature.⁽³²⁾》こうして彼女は、別の男性と結婚し、クラランの田園で家庭生活に専念するのである。しかし、家庭のために身を投じたその努力が実を結び、幸福の絶頂期を迎えんとしたその時、彼女は自己変革の成功を遂げることを得ず、死ぬ運命を与えられるのである。死、それはもはや再起するすべもない完全な破滅である。彼女に対してこの様な冷酷な運命が与えられるその原因を探ってみると、やはりそこに第1期の墮落の影響が、そのままの形で現われてくるのである。彼女は、かつて自らを落しめた恋愛を消去するため、苦しい努力を続け、それを成し得、その結果として幸福な家庭生活を得た、と確信したのであるが、そこに至ってもなお、一旦心を支配した感情は、未だそのままの力を保持したまま心の奥深くに残っていることが分ったからである。《Oui, j'eus beau vouloir étouffer le premier sentiment qui m'a fait vivre, il s'est concentré dans mon coeur. Il s'y réveille au moment qu'il n'est plus à craindre.⁽³³⁾》今やその感情は、心の中のわずかな動揺にも乗じて再び支配権を取り戻そうとしている。昔の感情の虜となったまま、現在の平穏な生活を続けることはできないし、自らの半生をかけて築いた家庭生活を失えば、もはやこの世の中には彼女が存在する場所は無きに等しいのである。墮落へと続く感情

に再度脅かされた今、かつての罪を避けるためにも、彼女にはもはや死ぬ運命しか残っていないと考えられる。彼女が残す最後の言葉によってそれは明らかとなる。《Je meurs dans cette douce attente : trop heureuse d'acheter au prix de ma vie le droit de t'aimer toujours sans crime et de te le dire encore une fois!⁽³⁴⁾》

この2段階を経て、彼女の人生は完全に破滅し尽すのである。しかも2時期に共通した直接的な原因は、ただ1度だけ、結婚を超越して純粋な恋愛感情に素直に従ったことにある。娘時代の恋愛は墮落を引き起こし、一度は不屈の精神によって、青春のひとつの誤ちとして償われたかに見えたが、ひとたび支配力を持ったその感情は、心の中に密かに根を下ろし、最後には、決定的に彼女の存在をも消滅させることになるのである。彼女のこの熱意、半生をかけて、神をも自らの精神変革の援助者として常に観照し、自己省察を重ねたその実践、にもかかわらず、最後まで昔の感情を殺し得ず、逆に翻弄されてしまった、という事実は、娘が女性の使命に関して何の束縛も受けずに、自由に恋愛に陥ることの重大な危険性を、何よりも雄弁に物語っているのである。彼女は、ただ一度自由恋愛を受入れたことによって、人生の失敗者となった。ジュリの失敗、それは正に彼女に与えられた教育の失敗を意味するのである。ソフィーは、2つの自然条件を完璧に追求し、結婚を使命として、完全に男性に従属する存在の育成を目的とした教育を受け、それに従って様々な束縛を課せられていたのに反し、ジュリは、これら2条件による制約もなく、自由な精神を育まれていた。彼女が家庭教師に恋心を抱き、しかも身分違いであると知りつつも、敢えてその感情を貫いた、その行為は——それこそが彼女の破滅の原因であるが——彼女が女性であるからといって、教育に於て特に厳しい束縛を与えられず、自由に放任された当然の結果として出てきたものであると考えられる。彼女はその教育方針に導かれて人生の破滅を迎え、死に至らねばならなかったのである。

こうして、*La Nouvelle Héloïse* に於ては、女主人公に与えられた教育が明白に否定されていると考えられる。しかも、この様な形でのジュリに対する教

育方針の否定は、同時に、相反した条件に基いて成立しているソフィーに対する教育方針の正しさを逆説的に裏付け、主張することになるのである。まさにこの点に於て、*La Nouvelle Héloïse* は *Emile* につながっていると言えよう。ルソーは、*La Nouvelle Héloïse* を書き上げて3年余り後に、*Emile* を完成したが、彼は、*Confessions* の中で、その信仰告白の箇所を一例として、「*Emile* の中の大胆な議論は、すでに *Julie* にことごとくある。」と述べている。私は、この2作品を女子に与えられる教育方針に視点を置いて考察してきたが、この点に於ても彼のこの言葉は容易に理解されるのである。

女子教育の方針に関して、*La Nouvelle Héloïse* は、*Emile* に於ける主張を、大いなる逆説としてその根底から支えているのであり、その意味でも、2作品の密接な関連性、特に *La Nouvelle Héloïse* が、その基盤として果す役割の重要性が明らかにされるのである。

＜注＞

- (1) *Emile*, livre cinquième
- (19) *ibid.*
- (20) *La Nouvelle Héloïse*, I, I
- (21) *ibid.*, I, XII
- (22) *ibid.*, I, XLVI
- (23) *ibid.*, I, I
- (24) *ibid.*, III, XVIII
- (25) *ibid.*, I, VI
- (26) *ibid.*, I XII
- (27) *Emile*, livre cinquième
- (28) *ibid.*
- (29) *La Nouvelle Héloïse*, III, XVIII
- (30) *ibid.*, I, XXVIII
- (31) 筆者の前論文「『新エロイズ』に於ける感情について」第3章で検討した。
- (32) *La Nouvelle Héloïse*, III, XVIII
- (33) *ibid.*, VI, XII
- (34) *ibid.*